

今日、「情報の時代」とか「情報革命」というコトバが盛んに使われている。コンピュータの発展のなかで、機械的な情報処理の点からみれば、このような規定もじゅうぶんならずける。しかし、情報と人間行動との関係はどうなっているのか、こうした基本的な問題はまだ明らかになっていないがたい。

マス・コミュニケーションを考えてみても、多くの調査・研究が行なわれているが、それらを一貫して体系化する試みはきわめて貧弱である。人間行動と情報とのかかわりぐあいを明らかにしない以上、多くの調査・研究の関連性をつけることは、たいへん困難なように思われる。

私はかつて放送会社にいたとき、視聴者や番組についての調査を仕事としていた。もっぱら、民放というワクのなかで、実験や調査をしたり、データの整理をしたりしていた。機会あって、この大学の新聞学専攻のスタッフに加えてもらって、そのワクから抜け度ることができた。が、対象をマス・コミュニケーションとしても、やはり、

これはまた別の一つのワクである。他の人間・集団をも含めた「環境」との相互作用のなかで、人間行動をとらえるという次元にまで至らないと、マス・コミュニケーションも理解できないのではないか。また多くの調査・研究の関連づけができないの



「情報学」の体系化

北村日出夫

ではないか。これが、いま私のかかえている問題である。そのために、私は環境との相互作用としての人間行動の基本的概念を「情報行動」と名づけてみた。このアプローチはまだじゅうぶん進展していないが、さらには、環境がもつ情報の意味の構造分析をも加味して行かなければならないと考

えている。

先日、広島で開かれた日本社会心理学会第八回大会のシンポジウムで「社会心理学の研究手法」がとりあげられた。実験的方法、調査方法、統計的方法の三つの立場から問題提起が行なわれ、議論は比較的活潑であった。このシンポジウムをききながら、私はつぎのような感想をもった。それぞれ、自分の得意な包丁を作り、ときずまし、その包丁にあった素材を料理しているが、板前さんの立場の発言が不足しているのではないか。素材にあった包丁をいろいろ駆使して料理し、うまく器に盛っていく板前さんが、今日のように分化した語学問のなかで必要なのではないか。

私は、コミュニケーションという人間の相互作用から「情報行動」と「情報分析」とを軸とした「情報学」とでもいうようなものをなんとか体系づけて、「情報の時代」といわれるこの社会での人間行動を考えてみたい。せめて、板前さんの見習いくらいになつてみたい。そんな尊大な「夢」をいだいている。

(文学部講師・放送概論)